



地中海沿いの町から砂漠の中に延びる一本道を数時間、ナツメヤシの木々に覆われたオアシスが現れた。12月下旬の四日間、サハラ・フェスティバルの会場となるドゥーズの町にはヨーロッパや中近東諸国からの観光客が集まり、一年で最もにぎやかなシーズンを迎える。

観客席からわく歓声、スピーカーから響くアラブ音楽……。フェスティバルは、鮮やかな衣装に身を包み、刀を持った男たちが馬に乗り、砂漠の民の勇敢な姿を紹介して始まった。猟犬によるウサギ狩りを実演し、トゥアレグ族が伝統的なダンスを披露。地方から集まった女の子たちは精一杯の化粧に、金・銀の首飾りや真つ赤なりポンを付け、緊張しながら観客の前を行進する。

そして「ウォー」という歓声とともに始まる競馬が祭りの最後を飾る。砂煙を立てながら猛スピードで突進。でも私の興味はそれを見に迫るラクダたちにある。背中の高さが2メートルの特大なラクダを間近で見るのは圧巻だ。

今年で42回目を迎えるサハラ・フェスティバル※。夕暮れのサハラ風景の中で見せる男たちの真剣な眼差しに、かつてラクダとともに暮らした人々の姿が浮かんでくる。

※2009年は12月26日〜29日に開催。



15

サハラ・フェスティバル

# オアシスで 砂漠の民が集う祭典

チュニジア  
TUNISIA



文・写真=大塚 雅貴

写真家。1968年千葉県出身。高校卒業後、写真家を志す。サハラ砂漠に魅了され、カイロでのアラビア語留学を経てアフリカを中心に撮影活動を行っている。写真集に『耕して天に至る—中国・雲南 世界一の棚田』(毎日新聞社)。